

徒に知能検査をして、20%の子供たちが「将来才能を開花させる人」と認定され、その結果は教師に伝えられました。それから数年追跡調査したところ、やはり、「才能開花組」の子供たちは他の子供たちよりも知能が高くなりました。

どんなテストか知りたくないですか？「うちの子供はどうなんだろう」「やらせてみたい」などと思いますよね。実は、テストはしたのですが、「才能開花組」はテスト結果とは関係なく無作為に選ばれた子供たちだったのです。要は



くじ引きのようなものです。ではなぜ、他の子供たちと同じ能力だったのに才能が開花したのか。

それは教師がその子の才能を信じたからです。「才能開花組」だと思ったのです。教師が生徒の才能を信じることで生徒に「自己成就予言（他人から期待されると期待通りの結果を出す）とすること（）」が働いたと考えられています。その後、「才能開花組」と知らない教師に引継がれても才能は伸びたそうです。これは子供だけでなく、成人でも同じ傾向があることが知られています。要は、指導者がしっかり信じて、期待しているかどうかによってその人の能力が伸びるということなのです。

さて、「あなたは口から食べられませんが」という医者が本当に患者さんのことを信じているかという問題です。「絶対口から食べてもらいたくない」という希望を持って接していたら、口から食べられる人はもっと多くい

ると思うのです。医療の世界では客観的評価がベースになるので、検査の値で判断されがちです。要は、検査をしたその時の実力が全てです。その後、能力が向上するかどうかということはあまり評価されません。「その方の能力を伸ばす」という視点を持つと、もっと良くなる人はいるのではないのでしょうか。

僕自身は、「口からもう一度食べたから五島先生に診てもらいたい」という依頼で入ることもあるので、絶えず「たのむ！食べられるようになってくれ！」という気持ちで過ごしています。患者さんを信じるというより、祈りに近いですね。決して病院の医療が間違っているという訳ではありませんが、何か変わってほしいなあと思います。